

# 457 軽症子宮内膜症患者における腹腔鏡所見と腹水中 Prostaglandin (PG) の関係

東邦大第1

森田峰人, 矢野義明, 浅川真也子, 小林信一, 武井成夫, 油田啓一, 小島栄吉, 大村 剛, 平川 舜, 百瀬和夫

〔目的〕子宮内膜症患者のマクロファージやPGなどの腹水中因子と不妊の関係が注目されている。本研究では、軽症子宮内膜症の腹腔鏡所見(特に色調)の違いによる腹水中PG濃度を検討した。〔方法〕r-AFS分類のStage IとIIの子宮内膜症患者22名, コントロールとして非内膜症性不妊患者(NEと略)10名を対象とした。腹腔鏡検査施行時に腹水を採取し, 腹水中PG(PGE2, PGF2 $\alpha$ , 6-keto-PGF1 $\alpha$ , TXB2)濃度を測定した。子宮内膜症患者は腹腔鏡所見により, ①黒・茶色を中心としたpigmented内膜症(PEと略)(12名), ②赤色を中心としたnonpigmented内膜症(NPEと略)(10名)の2群に分類した。腹腔鏡施行時期は卵胞期後期とした。〔成績〕腹水量はNE: 6.7 $\pm$ 2.7ml, PE: 16.8 $\pm$ 10.3, NPE: 8.3 $\pm$ 4.1でありPEはNEやNPEに比べ有意(P<0.05)に増加していた。PGE2濃度はNE: 20 $\pm$ 9 pg/ml, PE: 33 $\pm$ 22, NPE: 49 $\pm$ 22でありNPEでNEに比べ有意(P<0.01)に高値を示した。PGF2 $\alpha$ 濃度はNE: 53 $\pm$ 20 pg/ml, PE: 73 $\pm$ 21, NPE: 100 $\pm$ 55でありNPEはNEやPEに比べて有意(P<0.05)に高値を示した。6-keto-PGF1 $\alpha$ 濃度はNE: 112 $\pm$ 80pg/ml, PE: 159 $\pm$ 78, NPE: 526 $\pm$ 381とNPEはNEやPEに比べて有意(P<0.01, P<0.02)に高値を示した。TXB2濃度はNE: 33 $\pm$ 14pg/ml, PE: 73 $\pm$ 31, NPE: 124 $\pm$ 93とPEやNPEはNEに比べて有意(P<0.01, P<0.02)に高値を示した。〔結論〕NPEでは腹水中PG濃度がPEに比べ, より高値を示した。腹水中の高濃度のPGは, 正常な内性器の機能を障害する可能性があり, PEよりNPEにおいてその影響が大きく, 腹腔鏡を用いた詳細な観察により, 早期内膜症であるNPEを発見することが临床上重要であると示唆された。

# 458 Gestrinone(R2323)の卵巣直接作用

藤田学園保健衛生大, 東歯大市川病院\*

神谷貴之, 吉村泰典, 丸山邦之, 沢田富夫, 河上征治, 福島 穰, 小田高久\*, 大野虎之進\*

【目的】19-nortestosterone誘導体であるgestrinone(R2323)の卵成熟及び卵胞破裂機序に及ぼす直接作用についてin vitroでの家兎卵巣灌流装置を用い検討した。【方法】日本白色家兎を用い, (1)一側卵巣をmedium199のみ(対照群), 対側卵巣をR2323 10<sup>-4</sup>, 10<sup>-3</sup>, 10<sup>-2</sup>ng/ml(R群)で灌流, 30分後に両側卵巣にhCGを投与し, hCGによってin vitroで惹起される排卵に及ぼすR2323の直接作用を検討した。(2)一側卵巣をR2323 10<sup>-3</sup>, 10<sup>-4</sup>ng/ml, 対側卵巣をR2323+progesterone(P: 10<sup>-3</sup>ng/ml)で灌流し, 排卵卵子の成熟度, 変性に及ぼすPの効果について検討を加えた。【成績】(1)R2323はhCGによってin vitroで惹起される排卵, 卵成熟に影響を与えなかった(ovulatory efficiency; 対照群71.6 $\pm$ 5.6, R群52.7 $\pm$ 5.2:%GVBD; 対照群92.0%, R群93.3%)。R群におけるP, estradiol生合成量は, 各々218.0 $\pm$ 21.1, 1.06 $\pm$ 0.15ng/mlであり, 対照群との間に有意差は認められなかった。しかしR(10<sup>-4</sup>ng/ml)群の排卵卵子の変性率は68.8%であり, 有意(P<0.001)に卵変性を惹起した。しかもR2323と変性率の間には用量反応性が認められた。また灌流2hr後の卵巣組織ホモジネートにおける<sup>3</sup>H-R5020の結合量は, R2323添加卵巣において有意に抑制されていた。(2)R2323により誘起された卵変性は, P1 $\mu$ g/mlの補充により, はば完全に回復した(%degeneration, R群70.6%, R+P群21.1%)。【結論】R2323は, 卵成熟及び卵胞破裂機構に影響を与えないが, その抗P作用により卵変性を惹起する。換言すれば排卵過程におけるPは, 卵胞内におけるpremature degenerationを防禦する意味で極めて重要な要因であることが示唆された。